

歡喜

瞋恚

前月号でも本月号でも、遺教經の講話では「瞋恚」について厳しい御教えを世尊から頂戴いたしました。しみじみと拝読する時、み教えは骨髓に徹することであります。

腹を立てていれば正法が耳に入りません。『華嚴經』には「不聞正法障」と言っております。又悪い人のみ集って、善い人から遠ざかります。『華嚴經』には「悪知識障」「楽近凡庸障」「不信樂大威徳人障」「不見善友障」等、皆立派な人から去って、つまらぬ者や悪知識と交るようになって、いよいよ真実道の障を増すことでもあります。でありますから、我等は瞋恚を越えて生きさせて頂きたいものであります。

そしてこの瞋恚を越えて念仏道に蘇えった心を歡喜と言うのであります。

歡喜光

阿弥陀仏のことを、清浄光仏、歡喜光仏、智慧光仏と申します。御和讃には、

「無碍光仏のひかりには 清浄歡喜智慧光

その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり。」

とあります。衆生の貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱にそれぞれ働きかけて、煩惱さながらの中に、念仏道を成就して下さることでもあります。

わけて、我等の瞋恚の炎に対しては、歡喜光となつて我等に瞋恚を越えて歡喜を恵んで下さるのであります。

我等の現実

この世は果しなき苦しみに充ちていることでもあります。誰も彼も一荷に余る重い荷物を背負つて暗い顔をして生きています。こう書いている間にも、私の眼の底には、苦しみ続けている同胞の顔が次ぎ次ぎと現われて来ます。苦そのものの人生で、歡喜などと言えば如何にも浮いたことのように受け取れます。しかし私とても決して、安価に人生は歡喜そのものだ等と躍ろうと言うものではありません。

私どもはこれまで甲の事件でおきた苦しみを、乙の事件で解決しようとしたり、甲の悲しみを乙でまぎらしたり、そうしたことをくり返しては、苦しみや悲しみを深くして来ました。

そして又、ある日には、腹の皮が痛いほど笑ったことがあります。しかしそれが真実の喜びであったでしょうか。おへそがよれるほど笑った後も淋しい。かくして我等の現実はおよそ歡喜の世界からは遠いようであります。

根本原理

しかし、もし大地の上にかなる意味においても、方法によつても「歡喜」の一字が我等のものとならないならば、生きるということは無意味であります。

しかるに我等は、大無量寿経においてこの二文字が人生に還り来つて、生きて下さる根本原理を聞くことが出来ました。

「諸有の衆生、その名号を聞いて、信心歓喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼国に生れんと願すれば、即ち往生を得て、不退転に住せん……」この本願成就の文こそは、我等の上に尊き歓喜の生活の廻向成就せられる唯一の根本原理を説きたもうたものであります。「聞其名号、信心歓喜」その名号を聞くことよつてのみ信心歓喜が与えられる。その名号を聞くとは、如来の大悲のみ心を聞くことでもあります。大悲の真実にふれることであります。招喚のみ声を聞くことでもあります。如来大悲の真実によつてのみ、衆生の胸底に信心が成就します。如来を信ずる……如来を信ず予……如来を信ずることよつてのみ、歓喜の二文字が汝のものとなる。歓喜の二文字は、人生のものではない。彼岸の如来のすべてであればこそ、如来を歓喜光というのであります。今、この歓喜光仏は、名号となり、やがて念仏となつて静かに人生に、歓喜をもたらして下さる。

大地の実相

咽喉まめが見えるほどゲラゲラ笑っている。それは可笑しきであつて歓喜ではない。

戦場から愛子が帰つて来たのを迎えた親が高笑いし得るであろうか。

好きなのが手に入った。思うことが成就した。

盛大な祝賀会が開かれる。果してそれが歓喜であるか。

結婚、出産、普請等、人は皆悦びを言う。

果してそれが永遠の歓喜であり得るか。

そうした一切が、喜びの因ではなくて、大苦悩の因であり、やがての日の火車であることがわかる時、人は違つた世界の門をたたく。そしてそこに開かれる世界が、如来に生きる信心歓喜の世界である。

念仏は大地の実相を真に知るもののみ真実に領解せられる。

蓮如上人

蓮如様は、お若い時から御苦勞なされた方であります。御生母は幼い蓮如様をおいでどこへか行つてしまわれました。成長なきつてからも、御不幸ばかり続きました。親子三人へ一人前の食事があてがわれても、水に入れて、お汗を割つて、合掌して頂いた上人であります。叡山御勉学の時も、本願寺の蓮如は臭いとて相手にしてがなく、皆が冬、南側に移れば北側に一人、皆が北側に移れば南に一人、冬とても綿入がなく、金ヶ森の弥七が涙で送つた上衣や麦粉に涙する上人でありました。法難から法難、八十五年の御生涯は、御苦勞の一言につきていました。御往生なされ、み足をさすれば、草鞋のひものあとがきりつとついていたそうであります。御文章や、御一代聞書を、この御苦勞の中に念仏なきつた上人を憶念しつつ頂く時、まことにその御親切が、お慈悲が胸にしむことであります。その不幸より外、見出せない蓮如様ならこそ、

「古歌にいはく

うれしきを昔はそでにつゝみけり、こよひは身にも飴りぬるかな。

うれしきを昔は袖に包むといへる意は、昔は雑行正行の分別もなく、念仏だにも申せば往生する、とばかり思ひつるころなり。今宵は身にも余ると云へるは、正雜の分別を聞きわけ、一向一心になりて、信心決定の上に、仏恩報尽の為に申すころはおほきに各別なり、かるがゆゑに、身の置きどころもなく、踊り上るほどに思ふあひだ、よろこびは身にも嬉しきが余りぬると言へるころなり。あなかしこあなかしこ。」

と、上人こそ本當の喜びに生きられたのでありました。御一代聞書の中には、「ありがたや／＼と聖人の御前にてよろこぶことなり。」の御持言がたびたびのせられてあります。人間の不幸を悲しむよりも、み仏を信じ、み法に会い、聖人のみ教えを聞かれたことをもつと深く喜んだお方であります。ああ。我もまた、如来本願を信じ、親鸞聖人の御教化を受け得たことだけを喜んで生きさせたまえ。

み法に徹せよ

いかなる不幸に泣いている人でも、み法を聞けば必ず眞實の歡喜が与えられる。

それは動かすことの出来ない確信であります。静かにお念仏申しましょう。

「称ふれば恨みくやみの雲はれて、胸には残る信心の月。」

「苦しみの海をもやすく渡るべし、南無阿彌陀仏の船にのりなば。」

しかし、お念仏申しても暗い、味気ない、淋しい、苦しい、恨めしい、悲しい等々の人は、必ずもつと本氣になつて、徹底的に聞くのであります。如来を信じきり、み法を信じきり、善知識を信じきり、念仏に徹しきるところ、必ず今まで泣いたことは小さいことであつたことがわかり、自己の正体が知られ、ほのかに大海の洋々たる、金剛心の何ものなるかがわかつて来て、一切の苦惱をそのまま受け取りつつ、歡喜の光を寂しずかにあびて生きられる世界が開いて来ましょう。